

Title	ルソーにおける自尊心の問題
Sub Title	Le problème de l'amour-propre chez Rousseau
Author	吉田, 修馬(Yoshida, Shuma)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2013
Jtitle	エテイカ (Ethica). Vol.6, (2013.) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20130000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルソーにおける自尊心の問題

吉田 修馬

はじめに

ジャン=ジャック・ルソー（1712-1778）が『人間不平等起源論』（1755、以下では『不平等論』と略記）において、「自愛心（amour de soi）」と「自尊心（amour propre）」とを区別したことはよく知られている¹。

従来の研究では、ルソーによる自尊心の用語法に矛盾が見られることが指摘されたり²、ルソーにおける自尊心が悪徳の原因としてのみ理解されたりすることが多かった³。だがその一方で、『不平等論』では悪徳の原因とされている自尊心が、『新エロイズ』（1761）や『エミール』（1762）においては、（危険な情念としてなお警戒されているとはいえ、）積極的な役割も担っていることには、十分な注意が払われてこなかった。自尊心が積極的な役割を果たしうること注目した研究も例外的にはあるが⁴、自尊心についてのルソーの記述に一見すると不整合が見られることに関しては、なお詳細な検討の余地があるように思われる。

そこで本論文では、『不平等論』『新エロイズ』および『エミール』を取り上げて、これらの著作における議論を内在的に検討したい。まず第一節では自尊心を否定的に評価する議論、第二節では自尊心を否定しない議論、あるいは肯定的に評価する議論、第三節では自尊心を中立的に評価する議論を整理して、ルソーにおける自尊心に対する評価の整合性をめぐる問題を指摘し、一定の解釈を提示したい。

1. 自尊心に関する否定的な評価

ルソーが自尊心を否定的に論じていることはよく知られているが、自尊心は実際にはどのように批判されているのであろうか。

第一に『不平等論』においては、まず自尊心は自愛心と対比されて、以下のように述べられている。

自尊心 (*amour propre*) と自愛心 (*amour de soi-même*) を混同してはならない。この二つの情念は、その本性によってもその結果によっても、とても異なる。自愛心は自然的な感情であり、すべての動物をその自己保存に注意するようにさせ、そして人間においては、理性によって指導され、憐れみによって修正され、人間愛 (*humanité*) と徳 (*vertu*) を生み出す。自尊心は相対的で、社会において生まれる人為的な感情にすぎず、それぞれの個人に他の誰よりも自分自身を尊重するようにさせ、人間たちに彼らが互いに行うあらゆる悪 (*maux*) を引き起こし、そして名誉 (*honneur*) の本当の源泉である。このことがよく理解されるなら、私たちの原始状態、本当の自然の状態 (*véritable état de nature*) においては、自尊心は存在しないと私は言おう。(OI, III, p.219)

ここでは自愛心と自尊心が対比され、自愛心は自己保存に向かう自然的な感情であり、人間愛や徳を生み出すとされる一方で、自尊心は他人と比べて自分を優先させる相対的で人為的な感情であり、悪を引き起こすとされている。

では、その自尊心はなぜ生まれるのであろうか。ルソーにおける自尊心はさしあたり、自分と他人を比較して、自分を優先する感情である。しかし、自然の状態における人間は、孤立して自足して生活していると想定されており、そこには継続的な人間関係がない。『不平等論』の「第一

部」のいわゆる自然人は、他人と知り合うことがなく、自分と他人を比較することもないので、彼らの間には尊敬も軽蔑もなく、正義も不正もないとされている（OI, III, p.157）。そこで「自尊心の最初の動き」が生じるのは、「第二部」において、人類が原始的な道具や技術を持つようになり、人間が他の動物に対する優越性を感じるようになってからであると主張される（OI, III, pp.164-6）。

また、自尊心はどのようにして悪を引き起こすのであろうか。『不平等論』における議論を要約すると以下のようになる。まず、継続的な人間関係が成立すると、人間は他人に注目するようになり、他人から注目されたいと望むようになる。これが「不平等と悪徳への第一歩」であり、虚栄心や嫉妬心が生まれる。また、注目や尊敬を求めようになった人間は、侮辱や軽蔑に敏感になり、好戦的で残酷になる（OI, III, pp.169-70）。さらに、技術や精神の発達にともなって利益や所有物の不平等が拡大すると、競争や利害対立が生じる。そして、「自尊心が利害に目覚め、理性が活発になり、精神が完成の極致に達する」と、他人からよく見られようとして「存在」と「外見」が分離し、人間は他人をだましたり蔑んだりするようになる。そのようにして、人間は狡猾で冷酷で欺瞞的になり、他人の評価に振り回されるようになるという（OI, III, pp.174-5）。

このように、『不平等論』における自尊心は、自然の状態にはない継続的な人間関係や他人との比較を前提とするという意味で、相対的で人為的な感情であるとされ、利益や尊敬を過剰に求めさせることで、人間を悪徳に導くとして非難されている。このように、『不平等論』における自尊心は、否定的に評価されていると言える。

第二に『新エロイーズ』においては、自尊心の働きが少ないことは善いことであるとされている。例えば「第二の序文」では、主要な登場人物たちは「お互いに相手から華々しく見られようとは思いません。お互にとてもよく知り合い、愛し合っているので、彼らの間ではもはや自尊心が働く余地がありません」（NH, II, sp, p.16）と説明され、主人公のジュリは

「自尊心の影響を受けることが少ない心の持ち主」(NH, II, v-2, p.533)としてサン＝ブルーによって称賛されている。

それだけでなく、『新エロイーズ』における自尊心の弊害の指摘はさらに周到である。ジュリの友人であるクレールはジュリに対して、ジュリの謙譲の徳が「自尊心を隠すことによって、かえって〔自尊心を隠している自分に対する〕自尊心をかき立てる」という、逆説的で危険な性質を持つことを警戒するよう、二度に渡って忠告している(NH, II, iv-13, p.500; vi-2, p.639)。

このように、『新エロイーズ』における自尊心は、悪徳の源泉であると明言されてこそいないが、その影響がより少ないほうが好ましいものとされ、またその危険な性質が警戒されている。その意味では、『新エロイーズ』においても、自尊心を否定的に評価する議論が存在すると言える。

第三に『エミール』においては、子どもの発達過程において、自尊心が詳細に論じられている。

一つ目に、子どもの自尊心や悪徳は生まれつきのものか、という問いが提起されている。従来の「哲学」は、子どもの暴力的な行動を「本性的な悪徳によって、つまり人間の傲慢、支配欲、自尊心、そして邪悪さによって説明しようとする」という。これに対してルソーは、子どもは生まれつき支配欲を持っているのではなく、「周囲の人たちを自分の思うように動かすことができる道具のように見なすようになる」ことが、「子どもたちに支配欲を与えるのであり」、その結果として子どもは乱暴で邪悪になるのだと反論している。また、「支配が自尊心を目覚めさせ、[…] 習慣が自尊心を強める」という、自尊心が発生し強化される一連の過程は「自然の道からの逸脱」と呼ばれている(E, IV, p.288-90)。

以上の議論は、自尊心そのものを悪であると主張しているわけではないが、子どもの自尊心が強化される過程が「逸脱」と呼ばれていることから、自尊心が否定的に評価されていると考えることができる。

二つ目に、『エミール』においても、自尊心は自愛心と対置されている。

自愛心 (amour de soi) は、自分しか考慮しないので、自分の本当の欲求が満たされると満足する。しかし自尊心 (amour-propre) は、自分を他人と比べるので、決して満足することはないし、満足するはずもないであろう。というのは、この情念は他人をさしおいて自分を考へるのに、他人に対してもまた彼ら自身をさしおいて私たちのことを考へてくれるように要求するが、これは不可能だからである。こうして甘美で愛情に満ちた情念 (les passions douces et effectueuses) が自愛心から生まれ、憎しみに満ちたいら立ちやすい情念 (les passions haineuses et irascibles) が自尊心から生まれる。従って、人間を本質的に善良にするのは、あまり欲求を持たないことと、自分と他人をあまり比べないことである。人間を本質的に邪悪にするのは、多くの欲求を持つことと、意見に多くとらわれることである。(E, IV, p.493)

ここでの自愛心と自尊心の対比をまとめ直しておきたい。一方で自愛心は、自分と他人と比較せず、少ない欲求で満たされる。すると自愛心は、甘美で愛情に満ちた情念を生む。少ない欲求で満足し、愛情が深い人間は善良であると言える。他方で自尊心は、自分と他人を比較するので、多くの欲求を生み、その欲求は満たされえない。すると自尊心は、憎しみやいら立ちに満ちた情念を生む。多くの欲求に振り回され、憎しみに満ちた人間は邪悪であると言える。

この少し後の一節によれば、自尊心から生まれる憎しみやいら立ちに満ちた情念とは、具体的には「傲慢」や「虚栄心」のことである。それらの情念は、「自愛心 (amour de soi) が絶対的な感情であることをやめて」、(他人よりも自分を優先するという意味で) 相対的な感情である「自尊心 (amour-propre)」になることによって発生し、他人を犠牲にして発達すると述べられている (E, IV, p.494)。また、自分のことしか考へていなかった子どもが、他人に注目し、自分と他人を比較するようになることが、

「自愛心が自尊心に変わり、自尊心に関係するすべての情念が発生する地点」(E, IV, p.523) であるという。

ただし、だからといって人間は必然的に自尊心に支配されるとは断定されていない。人の性格において優しく憐れみ深い情念が優勢になるか、残酷で貪欲な情念が優勢になるかは、人間関係の中で自分をどう評価するかなどの条件によると主張されている (E, IV, p.523)。だからこそ「第四編」の前半までの教育においては、子どもの「自尊心や自分自身への高い評価を刺激せず、他人への支配や他人の不幸に自分の快樂を求めないように」(E, IV, p.545) するよう、細心の配慮がなされるのである⁵。

このように『エミール』において、自尊心の発達は逸脱であると捉えられている。また、自尊心は自愛心と対置され、自愛心は人間を善良にし、自尊心は人間を邪悪にすると論じられている。さらに、自愛心が絶対的な感情であることをやめると、自分を優先させる相対的な感情である自尊心に変わると考えられている。以上のように『エミール』においても、自尊心を否定的に評価する議論が存在する。

2. 自尊心に対する肯定的な評価（否定的でない評価）

前節で整理したように、『不平等論』だけでなく、『新エロイーズ』や『エミール』においても、自尊心を悪徳や弊害の源泉として、批判したり警戒したりする議論が存在する。しかし、『新エロイーズ』と『エミール』における自尊心に関する論述はそれだけにとどまらない。自尊心は場合によっては、徳の端緒となるなど、善い効果をもたらしうるものとして論じられている⁶。以下では、それを明らかにしたい。

第一に『新エロイーズ』においては、三つの論点が挙げられる⁷。

一つ目は、ジュリの母の死を伝えられて動揺するサン＝ブルーを励ますクレールが、自尊心は徳を行うつらさに報いると述べていることである。

本当の愛は徳と同じ利点を持っていて、そのために払った犠牲をすべて償ってくれます。[...] ジュリは確かに彼女にふさわしい仕方であなただから愛されたのだと、あなたが自分に証明すれば、あなたはますますジュリから愛されるでしょうし、あらゆるつらい徳に報いを与える甘美な自尊心 (*amour-propre exquis qui fait payer toutes les vertus pénibles*) が、その魅力を愛の魅力に混ぜ合わせるでしょう。(NH, II, iii-7, p.320)

ここでクレールは、有徳に行為した自分に対して持つことができるであろう自尊心の満足を利用して、有徳な行為をなすようにサン＝ブルーを促している。その意味では、自尊心が善い効果をもたらしうると主張されている。

二つ目は、いわゆるクラランの共同体において、使用人たちの自尊心が配慮されていることである。サン＝ブルーはヴォルマールとジュリによる使用人たちの雇用や管理を称賛して、以下のように述べている。

使用人たちは、人に知られず、見せびらかさず、自分をよく見せようとせず、お互いに相手のために尽くすように誘導されます。これは難しいことではありません。というのは、そのような慎みを主人が見ていて、そのためにより高い評価を与えられることを、彼らがよくわかっているからです。そのようにして、利益が得られ、しかも自尊心は何も損をしないのです (*l'intérêt y gagne et l'amour propre n'y perd rien*)。 (NH, II, iv-10, p.463)

クラランの共同体では、主人が使用人たちの利害心や自尊心を巧みに誘導することで、秩序が形成されている。その点では自尊心は、単になくすべきものとして否定されているわけではない。

三つ目は、ジュリの子育てにおいて、子どもと周囲の人との相互的な

愛情や、そこから子どもにもたらされる善い性質が「自尊心の確実な効果」と呼ばれていることである。サン＝ブルーはジュリの子育てを賛美して、以下のように述べている。

ここでは命令する人も服従する人もいません。しかし子どもは、自分が接する人から、自分がその人に対して抱く好意に応じた好意しか受けません。ですから子どもは、周囲の人たちに好意という力以上の力を持っていないことを自覚して、柔順で親切になります。他人の心を自分にひきつけようとして、自分からも他人に心を寄せます。というのは、人は愛されることによって、愛するものだからです。これは自尊心の確実な効果 (*l'inaffable effet de l'amour-propre*) として、平等から生じた相互的な愛情からは、いくら説教しても身につかない善い性質が、簡単に生まれてくるのです。(NH, II, v-3, p.571)

子どもは接する人に自分が向ける好意の程度に応じて、その人から好意を返される。それを知ると、子どもは他人に親切になる。このような相互的な愛情が、子どもに他人を配慮させ、子どもを親切にすることが、「自尊心の確実な効果」であると考えられる。

このように『新エロイズ』では、自尊心は徳のつらさを補って人を徳へと促すものとして用いられ、使用人たちの自尊心が配慮されており、相互的な愛情は子どもを親切にすることが自尊心の確実な効果と呼ばれている。

第二に『エミール』においては、二つの論点が挙げられる。一つ目は、自尊心の拡張という論点であり、自尊心を他人に広げるという提案がなされている。自尊心を刺激されなかったエミールは「他人への支配や他人の不幸に自分の快楽を求めない」だけでなく、「他人が彼を必要とするようには、他人を必要としない」が、他人にまったく無関心というわけではな

い。それでも彼は「自分と同類である人間に大きな関心を持っている」。また「他人が苦しんでいるのを見れば、自分もつらい」のであり、彼が「他人に幸福をもたらすことに貢献できるときは、それは幸福をともに享受する」ことになる⁸。彼は「すべてを自分中心に考え、善悪の観念を自分の利害だけで決める」ことはしない (E, IV, p.545-7)。これらに続けて、ルソーは以下のように唱えている。

自尊心 (*amour-propre*) を他の存在の上に広げよう。そうすれば、私たちは自尊心を徳に変えることになる。この徳が根をおろしていないような人間の心は一つもない。私たちの配慮の対象が、直接に私たち自身にかかわることが少なければ少ないほど、個人的な利害による錯覚をおそれる必要も少なくなる。この利害が一般化されればされるほど、それはますます公正になる。そして人類への愛 (*amour du genre humain*) は、私たちにおいては正義への愛 (*amour de la justice*) に他ならない。(E, IV, p.547)

これ以上は詳細な議論が展開されていないので、「自尊心を徳に変える」ということの意味が、(有徳ではない) 自尊心が有徳な自尊心に変わることなのか (有徳化)、自尊心が別の徳 (例えば、人類愛や正義への愛) になるということなのか (変容)、自尊心が別の徳を引き起こす、あるいはきっかけになるということなのか (原因・連関)、この一節だけからは決定しがたい。しかし、そのいずれにしても、自尊心は否定されていないと考えることができる。

二つ目は、自尊心の必要性という論点であり、「サヴォワ助任司祭の信仰告白」の直前の印象的な箇所、貧しく恵まれない境遇にいたために、「自負心 (*fierté*)」をなくし、人間は不正で邪悪な存在であると信じて、徳に憧れる想像力をなくし、「善悪についての本当の感情を失ってしまった」青年に対して (E, IV, p.560-2)、助任司祭は青年の自尊心を目覚めさ

せようとする。

精神的な破滅に瀕している不幸な若者を救うために、聖職者はまず若者に、自尊心 (amour propre) と自己尊重 (estime de soi-même) を目覚めさせようとした。自分の才能を有効に用いるなら、より幸せな未来が開けることも教えた。また、他人の美しい行為の物語によって、若者の心に高貴な情熱をよみがえらせた。そのような行為をした人々に対する賛美を起こさせて、自分も同じようなことをしたいという希望を若者に抱かせた。[…] 若者が自分をまったく善を行えない人間だと思わないように、また自分の目に自分が軽蔑すべき者に映るようなことを望まないように、自分自身に対する善い評価を取り戻させた。(E, IV, p.562)

ここでは自尊心は、自暴自棄にならずに、善を行うための端緒とされている。ここでは、ある種の気概や自尊感情としての自尊心は、立派な人間であろうとするために有効でかつ不可欠であると考えられている。

このように『エミール』においては、自尊心の対象を広げるということが提起され、また自尊心が善行をなす端緒とみなされている。

いくらか解釈を加えながらまとめるなら、『新エロイズ』においては、人は他人から愛されることで、他人を愛するようになると言われていることが注目に値する。確かに、他人から愛されることは（主に誇りという意味での）自尊心を満たすと言えるし、親切にしてくれる他人を愛するということは（主に利己愛という意味での）自尊心にかなうとも言える。いずれにしても、自尊心は否定されていない。

また『エミール』においては、自尊心は善行の端緒であり、自尊心を他人に広げることで、自尊心は徳に変わると言われている。確かに、自分を軽蔑する人や自暴自棄な人は、あまり善行をなさないであろう。また、自分を愛するように人類を愛せば、その愛は自分中心の利害から離れて正

義にかない、その人は公正で有徳になるであろう。

以上のような『新エロイズ』と『エミール』の叙述からは、自尊心が何らかの形で相互的で公平な働き方をすれば、善い効果をもたらすという議論を取り出すことができる。さしあたりこの議論そのものは認めうるものであると言える。

3. 自尊心に関する中立的な評価

前節までで、自尊心に関して否定的な議論と、肯定的な議論（否定的ではない議論）が存在することを明らかにした。しかし、自尊心が否定的にも肯定的にも論じられているとすると、自尊心に対するルソーの評価に矛盾があるのではないか、という疑問が生じることになる。そこで第三節では、自尊心に対するルソーの評価の揺らぎの問題を検討する。まず、自尊心は偶然や関係しだいで善くも悪くもなるとして、自尊心が中立的に論じられている箇所があるので、この議論を手がかりにしてみたい。

第一に『新エロイズ』において、ジュリは以下のようなヴォルマールの考えをクレールに紹介している。ヴォルマールは様々な立場を経験する中で軍人になり、情に厚いジュリの父と友人になったことで、人間愛に対して以前より好感を持つようになり、利害心だけが人間の行為の動機ではないことや、徳と対立する偏見の中にも徳のために利用できるものがあることを知ったと述べて、こう続ける。

人間の一般的な特徴は自尊心であって、それ自体では中立的であり、それを変える偶然によって、つまり慣習、法律、地位、運命、および私たちの人間的なすべての事柄に左右される偶然によって、善くも悪くもなると思いました (Je conçus que le caractère général de l'homme est un amour-propre indifférent par lui-même, bon ou mauvais par les accidents qui le modifient et qui dépendent des coutumes, des loix, des

rangs, de la fortune, et de toute notre police humaine.)。 (NH, II, iv-12, p.491)

ここでの「人間の一般的な特徴としての自尊心」は、「それ自体では中立的」であり、状況や偶然によって「善くも悪くもなる」ものであるとされている。

第二に『エミール』では、このように述べられている。道徳を知る以前の子どもは「多くの悪いことを行うかもしれないが、悪いことをしたことにはならないであろう。悪い行為は、危害を与えようとする意図によるものであって、彼はそのような意図を決して持たない」。つまり、道徳を知る以前の「行為にはどんな道徳性もなく、[...] 道徳的に悪いことは何もしない」として、「子どもをその年齢に応じて扱う」ことが主張される (E, IV, p.321-2)。そして以下のように続けられている。

人間にとって唯一の自然的な情念は自愛心、あるいは広い意味における自尊心である。この自尊心それ自体、あるいは私たちに關する限りの自尊心は、善良で有用なものである。そしてこの自尊心は、他人とは必然的な關係を持たないので、この点では、自然的 [本性的] には中立的である。自尊心が善くも悪くもなるのは、それが適用されたり、それに関係が与えられたりするからにすぎない (La seule passion naturelle à l'homme est l'amour de soi-même ou l'amour-propre pris dans un sens étendu. Cet amour-propre en soi ou relativement à nous est bon et utile, et comme il n'a point de rapport nécessaire à autrui, il est à cet égard naturellement indifférent; il ne devient bon ou mauvais que par l'application qu'on en fait et les relations qu'on lui donne.) (E, IV, p.322)。

ここでは、「広い意味における自尊心」が「自愛心」と重ね合わされて、「自然的な情念」であるとされている。また、「自尊心それ自体」あるいは

「私たちに限る限りの自尊心」は「善良で有用なものである」が、他人とは必然的な関係を持たないという意味では「中立的」であり、関係が与えられることによって、「善くも悪くもなる」とされている。

さしあたり、『新エロイーズ』においても『エミール』においても、自尊心はそれ自体では「中立的」であり、状況や偶然、他人との関係しだいで「善くも悪くもなる」と明記されている点は、共通して見出される。

以上の議論を踏まえると、自尊心が否定的にも肯定的にも論じられているという、自尊心に対するルソーの評価の揺らぎを、さしあたり以下のように理解することができる。つまり、自尊心は、もともとは「中立的」なものであり、偶然や関係によって「善くも悪くもなりえる」ものであり、自尊心が善いものになる場合には肯定的に論じられ、悪いものになる場合には否定的に論じられると解釈すれば、さしあたり評価の揺らぎを説明することができる。また、自尊心は論理的には「善くも悪くもなりえる」ものであるとしても、実際には悪くなりやすいものとして考えられているとすれば、ルソーの議論全体においては、自尊心の否定的な側面がより強調されているとしても不思議ではない。このように解釈すれば、自尊心が否定的にも肯定的にも論じられていることは、矛盾ではない。

しかし自尊心を中立的に論じている上記の二つのテキストには、より深刻な二つ目の矛盾が見出される。

一方で『新エロイーズ』においては、「人間の一般的な特徴としての自尊心」は、「それ自体では中立的」で、偶然によって「善くも悪くもなる」とされている（NH, II, p.491）。他方で『エミール』においては、「自尊心そのもの、あるいは私たちに限る限りの自尊心」は「善良で有用」であり、「自然的（本性的）には中立的」であるが、他のものとの関係しだいで「善くも悪くもなる」とされている（E, IV, p.321）。

つまり、自尊心を中立的に論じたテキストにおいて、自尊心が「善くも悪くもなる」のは共通するとしても、自尊心は「善い」とも、「善くも悪くもなる」ともされている、という矛盾が存在するのである。それでは

自尊心それ自体は「善い」とも、「善くも悪くもなる」とも述べられていることを、どのように理解すればよいであろうか。

一つの可能性は、「自愛心、あるいは広い意味における自尊心」という記述を重視し、ルソーにおける自尊心は、自愛心を指す場合、あるいは自愛心と自尊心を含む広義の自尊心を指す場合がある、とする解釈である。この解釈を補強する傍証としては、当時は利己心全般が「自尊心」と呼ばれ、その中で特に是認されるものが「自愛心」と呼ばれていたことが挙げられる⁹。

しかし、この可能性に対しては、次のような反論も考えられる。

一つ目は、自愛心は自分にしか関係しない感情であるという点である。自愛心は自分と他人を比較しないという意味で「絶対的な感情」(E, IV, p.494)であり、他人との比較が生じることで「自愛心が自尊心に変わる」(E, IV, p.523)と述べられている。つまり、状況や偶然によって、あるいは「関係」しだいで善くも悪くもなるとされている自尊心が自愛心のことであるとすると、自愛心は「自分にしか関係しない」とするルソー自身の見解と整合的とは言えないのではないか、というものである。

二つ目は、「自愛心はつねに善い」(E, IV, p.491)という点である。つまり、状況や偶然によって、あるいは関係しだいで「善くも悪くもなる」とされている自尊心が自愛心のことであるとすると、自愛心は「つねに善い」というルソー自身の見解と整合的とは言えないのではないか、というものである。

そこで、次のように考えられるのではないだろうか¹⁰。

まず自尊心は、その起源や性質としては、他人の存在や他人との比較を前提として、自愛心から発生する。自愛心は、自分だけに関係し、つねに善いものである。その自愛心から発生した自尊心が、ある時点で自分だけに関係する限りでは、「善い」ものである。そしてその時点では善いものである自尊心は、状況や偶然によって、あるいは他人との関係しだいで「善くも悪くもなる」。以上のように考えることはできないだろうか。

つまり、自尊心は他人との比較という観念を前提として発生するが、つねに他人との比較において働いているとは限らないとする。自分だけに関係する自尊心は「善い」。その自分だけに関係していた自尊心が、他人との具体的な関係において働くと「善くも悪くもなる」。そしてこの「善くも悪くもなる」ことが、「中立的」と呼ばれている。このように理解すれば、「自尊心そのもの、あるいは私たちに关する限りの自尊心」は「善良で有用であり」、「それ自体では中立的」または「自然的（本性的）には中立的」であるが、状況や偶然によって、あるいは他のものとの関係しだいで「善くも悪くもなる」ということが整合的に解釈できるのではないだろうか。

さらに、もともと他人との比較を前提として発生する自尊心は、自分だけに関係するところにとどまることは少ないであろう。また例えば、邪悪な人の自尊心は否定されるべきものであろうし、善良さを保つことが難しい人間関係において自尊心は否定的な働きをすることが多いであろう。そのように理解すれば、ルソーにおける自尊心が否定的に論じられる場合が多いことも説明できる。

おわりに

以上のように本稿では、ルソーの自尊心についての議論を明らかにし、ルソーの自尊心における二つの矛盾について検討した。

一つ目の矛盾は、ルソーが自尊心を「否定的」にも「肯定的」にも論じているということである。これについて本稿は、自尊心はもともと「中立的」なものであり、偶然や関係によって「善くも悪くもなりえる」ものであり、自尊心が善いものになる場合には肯定的に論じられ、悪いものになる場合には否定的に論じられていると理解すれば、矛盾は解決されることを明らかにした。

しかし、自尊心を中立的に論じたテキストには、自尊心は「善い」と

も、「善くも悪くもなる」ともされている、というより重大な二つ目の矛盾が存在する。これについて本稿は、自分だけに関係する自尊心は「善い」。その自分だけに関係していた自尊心が、他人との具体的な関係において働くと「善くも悪くもなる」。そしてこの「善くも悪くもなる」ことが、「中立的」と呼ばれている。このように理解すれば、矛盾なく解釈できるのではないか、という可能性を提示した。

(よしだ・しゅうま 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

* ルソーの著作からの引用は、プレイアード版『全集』(*Œuvre complètes de Jean-Jacques Rousseau*, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebon et Marcel Raymond, Bibliothèque de la Pléiade, 5 tomes, Paris, Gallimard, 1959-1995.) から訳出したが、翻訳にあたっては各種邦訳を参考にさせていただいた。

本文中の括弧()内のアルファベットは著作の略称、大文字のローマ数字は『全集』の巻数、『新エロイズ』の小文字のローマ数字とアラビア数字は部と書簡番号、アラビア数字は頁数を示す。*Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes* (『人間不平等起源論』)はOI、*Julie ou La Nouvelle Héloïse* (『新エロイズ』)はNH、*Émile ou De l'éducation* (『エミール』)はEと略記した。

- 1 「自愛心 (amour de soi)」と「自尊心 (amour propre)」については、原語との対応を重視した「自己愛」と「利己愛」という訳語も考えられる。しかし、「利己愛」の積極的な役割というのは意味が伝わりづらいと思われるので、本稿では「自愛心」と「自尊心」という訳語を採用する。
- 2 古典的な研究では、以下のものがある。Ernest Antoine Aimé Léon Seillière, *Jean-Jacques Rousseau*, Paris, Garnier, 1921, pp.137-41.
- 3 代表的な研究としては、以下のものがある。Raymond Polin, *La politique de la solitude : essai sur la philosophie politique de Jean-Jacques Rousseau*, Paris, Sirey, 1971, p.49.
- 4 下記では、ルソーには悪徳の原因そのものを用いて人間を徳へと転換させようとする発想があり、自尊心はそのような「病の内なる治療薬」の一つであると示唆されている。Jean Starobinski, *Le remède dans le mal : Critique et légitimation de l'artifice à l'âge des Lumières*, Paris, Gallimard, 1989, pp.165-232.

さらに以下では、自愛心や自尊心などの「利己的な情念」に関してルソーの教育思想が当時の思想史的な文脈に置き直して詳細に論じられている。坂倉裕治『ルソーの教育思想——利己的情念の問題をめぐって』風間書房、1998年。

- 5 下記を参照。坂倉、前掲書、149-158頁。
- 6 このような自尊心を肯定的する議論の典型は、ルソーの同時代人ではエルヴェシウスが想起される。例えばシュニーウィンドは、「自己愛の気高い効果」を論じた思想家として、ジョン・ゲイ、ハートリー、エルヴェシウス、ドルバック、ペイリー、ベンサムを挙げている。Jerome B. Schneewind, *The Invention of Autonomy: A History of Modern Moral Philosophy*, Cambridge, Cambridge U. P., 1998, pp.404-28. ルソーの議論はエルヴェシウスやドルバックと同じではないが、ルソーにも自尊心の働きを肯定的に評価する議論があるということは、注意されてよいように思われる。
- 7 自尊心が善い効果を持つという主張とは、逆向きの主張であるが、自尊心を満足させることが否定されていない議論も存在する。例えばヴォルマールは、冷静な観察や経験による知恵のおかげで判断を誤らないことが「自尊心に報いてくれる」と述べている (NH, II, iv-12, p.491)。
- 8 このような行為は、ホップズやエルヴェシウスのような（ある種の「心理的な利己主義」の）立場からすれば、利己的な動機による行為であるとみなすであろう。
- 9 最も包括的にルソーにおける自尊心の意義を論じた前掲の研究において、自尊心に関する記述の不整合の問題は、「「自己への愛」一般を指す類概念として17世紀以降広く用いられた「利己愛」の特殊形として「自己愛」を後から導入し、「自己愛」から「利己愛」への変容過程を改めて論じたために起こった記述上の混乱であり、思想そのものに矛盾はないと思われる」（坂倉、前掲書、151-2頁）として、思想史的な文脈に照らし合わせて説明されている。
- 10 さらに別の解釈として、「善悪」に関して二つの位相を区別することで矛盾を説明する可能性も考えられる。例えば、道徳以前の「善い」ものが、道徳的には善悪無記という意味で「中立的」であり、それが道徳的には「善くも悪くもなる」と理解すれば、二つの矛盾を説明することができるかもしれないが、ここでは指摘することにとどめたい。